

場が生む心

就実大学一年（岡山県）

中野 公瑛

私は毎週月曜日が楽しみだ。未だかつて月曜日を楽しみにしていたことはなかったと思う。週の始まりの月曜日は朝から体が重くて、既に休日が待ち遠しい人が多いのではないだろうか。私もその気持ちがないとは言えない。月曜日の朝は常に辛い。しかし、そんなどんよりとした気持ちをスッと取り除いてくれるのが月曜の午後からある茶道のお稽古である。

今年四月、新型コロナウイルスの感染が比較的収まっていた岡山県。大学の講義は一部の授業を除いて、全て対面で行われた。私は小学一年生から六年生まで茶道のお稽古に通っていたが、中学入学に伴いスケジュールの関係もあって辞めてしまった。大学生になったら茶道を再開すると決めていたので、迷わず茶道部に入部した。また、教養科目として茶道の授業も受講することにした。初めて大学の茶室に訪れた日、少し緊張していたが一步踏み入れるとそこ

は私にとってとても心が落ち着く空間であった。玄関はしんと静かで少し薄暗い、だからといって淋しい訳ではない。中に入ると、露地の緑の葉から差し込んだ光が室内を照らす。自然と背筋が伸び、気持ちもスッと切り替わるようだった。大学の始まりと共に、私の茶道も再び始まった。

季節を感じながらお花を拝見し、素敵なお菓子に心を躍らせたり、分からないなりにもお軸に書かれている言葉を考えてみたり。お点前は、もうすっかり忘れてしまっていたが、何度かすると体が思い出した。茶室に入り気持ちを切り替え目の前のことだけに集中し、心を込めてお茶を点てることは雑然とした日常を忘れさせてくれた。

しかし、そんな憩いの時間も新型コロナウイルスの感染拡大によって吹っ飛んでしまった。対面授業はなくなり、部活もできない。友人と会って話すことも、自宅に客を招くことも難しい。自宅に籠りきり、授業も、課題も、気分転換も、休息も、全て同じ空間で行わなければならなくなった。元々気持ちの切り替えが苦手な私には、大きな試練になった。

大学に行き教室に入れば自然と授業に、自習スペースに行けば課題に、自宅に帰れば休息にと気持ちを切り替えやすい。茶道も同じで、部活がない間は自宅でお稽古してみたものの、茶室にいる時のあのピリツとした空気感や、心の落ち着きは得られなかった。場というものの重要性を痛感した。最近ではあらゆるものがオンラインになり、その場

にいらなくても経験できることが増えたが、それだけではその物事の本当の姿を知ることができない。肌で感じ取るものはまた違った意味を持つと思う。またその場で相手と時間、空間を共有することでしか得られない心の移ろいこそ大切な事だと思う。思いやりという言葉はよく耳にするが、それは相手がいてこそその言葉である。コロナ禍で人とのコミュニケーションの取り方は大きく変化した。通信技術により、直接対面せずとも相手の顔を見ながら、声を聞きながら意思疎通ができる。しかし相手の細かな所作に滲む、温もりや心遣いを受け取ることはなかなか難しいと感じる。茶道から学び大切にしたいと考える、相手を思う気持ちの表し方が、今現在の状況では実行できないことがもどかしい。

今、世の中は困難で溢れかえっている。辛い状況に追い込まれている人、最前線で戦う人、ギリギリの状況にいる人。そして私たちは困難な世の中という時間と空間を共有している。遠くにいる人には難しいことも、そばにいる人ならできると思う。それぞれが、すぐそばにいる人に精一杯の方法で、思いやる気持ちを伝えたなら、それは段々と広がってゆくと思う。茶道の根底にあるものは相手を思いやる心であると思う。あれもこれもできないと捉えず、できる事をできる範囲でしていきたい。自分のすぐ隣にいる誰かに思いやりの心を伝えられるようにしたい。そして以

前の穏やかな日常が戻ってくる日を待ちたいと思う。